

## 小笠原コーヒー

小笠原でコーヒー栽培が始まったのは 1878 年、父島にコーヒーの木を植えることから始まった。わずかながら、今でも島の農園の中には、その木を起源に持つところがある。第二次世界大戦中、民間人は島を離れることを余儀なくされ、コーヒーの木は放置された。戦後はアメリカが島を基地として使用したため、島に戻ることはほんの数人で、小笠原の統治権が日本に返還された 1968 年になってようやく残りの島民の帰還が認められた。ジャングル化した土地の復興に島民が取り掛かった際、そのうちの 1 人である野瀬昭雄（のせあきお）氏は、家族が戦前に植えたコーヒーの木の子孫と思われる木を発見した。その若木は、戦時中にほとんど被害を受けなかった島の中央部で自力で命を繋いできたのである。

調べた結果、野瀬氏の木は 19 世紀末に最初に植えられたコーヒーの木の子孫であることが判明した。ティピカ種の木で、世界で最も広く栽培されている品種であるアラビカ種の一つである。小笠原にあるコーヒー農園はわずか数軒で、栽培と生産は手作業で行われている。病気と闘う大規模農園とは異なり、小笠原のコーヒーの木にとって一番の脅威は、特定の季節になるとやって来る台風である。晩夏から初秋にかけて嵐が島を吹き抜け、年に一度の収穫物だけでなく、木そのものも簡単に駄目にしてしまうおそれがあるのだ。